

# バードリサーチ ニュース

2006年4月号 Vol.3 No.4

2006. 4.14.

Photo by Tsutsumi Akira

## 参加型調査

### ヒクイナを探してください!

平野 敏明

#### 1. 減少しているヒクイナ

ヒクイナ *Porzana fusca* は、日本では北海道、本州、佐渡、隠岐、四国、九州で繁殖しています。北日本では夏鳥ですが、九州や沖縄では冬期にも生息しています。その特徴的な鳴声は、時代劇の夏の夜のシーンなどにもよく使われ、夏の風物詩として親しまれてきました。

しかし、このような身近な鳥だったヒクイナが今、減少しつつあるようです。1970年代と90年代に行なわれた環境省の全国鳥類繁殖分布調査では、ヒクイナの分布が全国的に縮小しており、特に東日本でその減少が顕著なことが示されています(環境省生物多様性センター 2004)。

栃木県でも、1980年代前半までは平野部の河川や沼の周りの草むら、水田、奥日光の戦場ヶ原などに普通に生息し、朝夕には鳴声が聞かれ、ヒナ連れの姿も観察されました。

ところが、近年、めっきりとヒクイナの鳴声を聞くことがなくなりました。ヒクイナが確認されたことがある場所で、1995~1996年と2002年にヒクイナを探し、アンケート調査を実施したところ、1996年には1980年代までに生息が確認されていた15ヶ所のうちの3ヶ所、2002年には同じく43ヶ所のうち4ヶ所で生息が確認されただけになっていました(平野ほか 1997, 2003)。

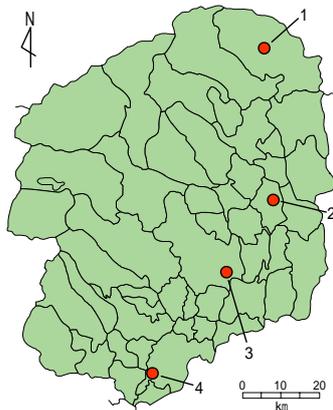


図. 栃木県の2002年のヒクイナの調査地点と生息確認地点。  
赤●: 生息を確認した地点  
白○: 生息を確認できなかった地点

#### 2. レッドデータブックの記載状況

これらの結果に基づいて、2005年に栃木県版のレッドデータブックでは、絶滅危惧 I 類に選定されました(栃木県林務部自然環境課・栃木県立博物館 2005)。その他、インターネットで各県のレッドデータブックを調べてみると、多くの県で何らかのランクに選定されていました。特に関

東地方の千葉県や埼玉県などでは、絶滅の危険度が高いランクにされていました。一方、徳島県や佐賀県など一部の県のレッドデータブックには掲載されていませんでした。地域によって、ヒクイナの取り扱いが異なっているのです。こうした違いは、単に詳しい情報がないためかもしれませんが、全国的に見るとまだヒクイナの良い生息環境が残されている地域があることを示しているのかもしれませんが。

#### 3. ヒクイナ生息状況調査

そこで、バードリサーチでは、全国的なヒクイナの生息状況の調査を実施します。現在日本にどれくらい生息しているのか、どの地域で減少しているのか、あるいはまだたくさん生息している地域があるのか、それはどういった環境なのか、といったことについて私たちと一緒に調べてみませんか?

調査方法は、ヒクイナの繁殖時期(5月から7月)に早朝や夜間にテープレコーダなどで鳴声を再生し、それに反応するヒクイナの数を記録するものです。

また、合わせて簡単な環境や過去の記録の有無のアンケートも実施します。「野外調査は時間がないのでできないけれど、ヒクイナの情報は持っている」という方はアンケートだけでも結構ですので、ぜひご協力ください。

ヒクイナについては、ほとんど詳しい調査が行なわれていません。一人でも多くの方の参加をお待ちしています。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_hikuina.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hikuina.html)

#### 4. 引用文献

- 平野敏明・五反田薫・高松健比古. 1997. 栃木県におけるヒクイナの生息状況. *Accipiter* 3: 1-6.
- 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎・小堀脩男・志賀陽一. 2003. 栃木県におけるヒクイナの生息状況(2002). *Accipiter* 9: 1-9.
- 環境省生物多様性センター. 2004. 鳥類繁殖分布調査報告書. [http://www.biodic.go.jp/reports2/parts/6th/6\\_bird/6\\_bird\\_16.pdf](http://www.biodic.go.jp/reports2/parts/6th/6_bird/6_bird_16.pdf)
- 栃木県林務部自然環境課・栃木県立博物館編. 2005. レッドデータブックとちぎ. 栃木県林務部自然環境課. 宇都宮.



写真. 水田を歩くヒクイナ.

# 活動報告

## ベランダバードウォッチ2005 越冬期調査結果 植田 睦之

ベランダバードウォッチは3月31日現在、94名の方に参加いただき、95地点を調査をしています。冬の調査は今回が初めてだったということもあって、なかなか目に見える成果は出せていませんが、その調査結果をお知らせします。

### 1. 記録された鳥

冬の調査で記録された鳥は94種でした。2005年の繁殖期の調査では総観察回数が少ないにもかかわらず、104種が記録されていました。繁殖期よりも冬の方が少ないのは少し意外でしたが、今年の冬は全国的に冬鳥が少ないようでしたので、そのことが影響したのかもしれない。

冬に記録率の高かった鳥はスズメ、ヒヨドリ、カラス類、キジバト、ムクドリ、ハクセキレイ、シジュウカラといった鳥たちで、繁殖期の調査とも大きな違いはなく、ツバメとツグミ・ジョウビタキが入れ替わった程度でした。これらの種が年間を通して住宅地の主要な種と言えます。

### 2. ツグミとジョウビタキの記録率の季節変動

代表的な冬鳥2種について、記録率の季節変化を見ました。するとジョウビタキは、11月上旬から1月上旬まで安定して観察され、その後、記録率が落ちるというパターン

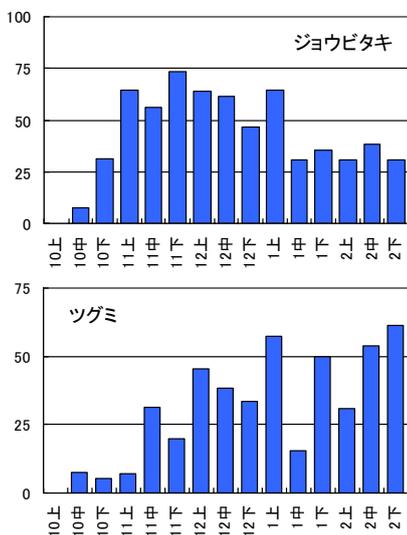


図. ジョウビタキとツグミの記録率の季節変化。ジョウビタキの記録率は安定していたが、ツグミは安定していなかった。

ツグミについては、東京で観察していたところ、2月になってからも、北から渡ってきていると思われる高空を通過する群れが見られ、例年とは違って落ち着きがないように感じました。渡りの時期や移動の仕方などツグミの行動が、例年と少し違っていたことが反映されて、今年は記録率が一定しなかったのかもしれない。このあたりは来年以降データが蓄積してくると、その年ごとの冬鳥の状況を示すことができるのではないかと考えています。

## 飛翔性昆虫ウォッチ 予備調査をはじめます！ 植田 睦之

### 1. 調査の目的

日本では、夏鳥が減少しています。留鳥に比べて減少率が大きいことから、越冬地の環境の悪化が影響しているのではないかと考えられていますが、もう一つこれらの鳥たちに共通する特徴として、飛翔性の虫を食べていることが多いことがあげられます。ヒタキ類しかり、サンショウクイしかり、ヨタカしかりです。それに対して留鳥はカラ類やホオジロ類などイモムシなどへの依存度が高いように思います。



写真. 蛾を捕まえて、ほくそ笑むアオバズク。  
[ Photo by 内田博 ]

以前、山でキャンプをすると、街路灯に集まる無数の虫がコッヘルに飛び込んできて、食事に苦労しました。しかし、最近はそうでもないように感じます。また、網戸に集まってくる虫も激減しているように感じます。これらの虫の減少が夏鳥の減少の一因になっているのではないのでしょうか？

そこで、今後の虫の変化を評価するための基礎データを得るために飛翔性昆虫ウォッチをはじめたいと考えました。

### 2. 調査試行の結果

昨年のニュースレターの9月号 (Vol. 2 No. 9) にも書きましたが、自動販売機の光に夜に集まってくる虫をかぞえる「自動販売機トラップ」という方法を2005年の夏に試しました。この調査から、虫の分布の季節変化などが見えてきました (図)。季節変化がわかるということは、年変動のモニタリングにも適していると考えられますので、今年はこの方法が全国的に通用する方法なのか確かめたいと思います。



図. 2005年4月(左)、6月(中央)、8月(右)の自動販売機トラップによる調査の結果。季節的に昆虫の分布が変化している。

### 3. 今年と今後の調査計画

2006年は、「自動販売機トラップ」を各地で実施してもらって予備調査をします。そして、この方法が、東京以外の地域でも使えそうだとということになれば、2007年に本調査を実施します。その後は5年に一度程度の頻度で調査を繰り返していきたいと考えています。調査をお手伝いいただける方は、[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_hisho.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hisho.html) に詳しい調査方法が載っていますのでご覧ください。

不明な点などございましたら、植田 (mj-ueta@bird-research.jp) までご連絡ください。

## 学会情報

### 第53回生態学会大会参加報告

3月24～28日に、新潟県の新潟コンベンションセンター(朱鷺メッセ)で、第53回生態学会大会が開催されました。5日間の開催期間中、2日間のみですが、私も参加してきました。保全生態学に関する発表が圧倒的に多く、基礎科学に重点をおいている私としては少し寂しくもありました。

また、今回の大会は東アジア生態学会連合(EAFES)大会と連動していて、同じ会場でEAFESの発表もありました。こちらは全て英語での発表です。残念ながら私は聴きに行くことができませんでしたが、鳥類に関する研究発表もそれなりに見受けられ、頼もしく思いました。

#### ウトウの親鳥と雛の餌は違うのか？ ～安定同位体分析を用いた食性解析～ ○伊藤元裕・南浩史・綿貫豊

同位体とは、同じ元素でもミクロなレベルで質量の異なるもの同士を指します。これはその元素の原子核を構成する中性子の数が違うことによって生じます。重さが異なっているため、例えば同じ窒素でも、異なる環境で生息する生き物同士では、生体を構成する同位体が違ってくるということがわかっています。

このことを利用して発表者たちは、ウトウの親鳥とヒナが何を食べていたのかを調べました。方法は、まず実際の胃内容物の種類ごとの同位体を調べます。次にウトウの血漿の同位体を調べて餌動物のデータと比較することで、吸収された餌が何であったのかを推定するというものです。その結果、ウトウの親鳥はヒナに自分が食べているものと同じものを与えているということがわかったそうです。

同位体を用いて見えなくなった餌を追跡するという着眼点はとても革新的で、技術的にも発展性が高いと思います。今回の発表に限って言えば特に珍しい結果が得られたわけではないかも知れませんが、今後もこの研究を続け、あっと驚くような成果を発表して欲しいと思いました。

#### データ解析で出会う統計的問題～個体差のモデリング～ 企画者：粕谷英一・久保拓弥

近年使われ始めている、一般化線形混合モデル(GLMM: Generalized Linear Mixed Model)という解析方法を紹介するための自由集會に参加してきました。昨年の鳥

学会の大会で、一般化線形モデル(GLM)についての自由集會があり、私も発表させていただきました(詳しくは、<http://www.rikkyo.ne.jp/~z2002020/stat/stat2005.html>をご覧ください)、GLMMはGLMを改良したようなものです。

データを解析するとき、注意しなければならないことの一つに「データの独立性」があります。例えば複数の個体から、さえずりの頻度などのデータを複数取ったとします(図1)。

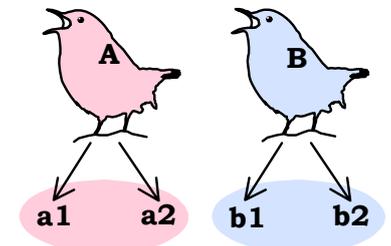


図. 階層性を持ったデータの例.

その時、あるデータ a1 というのはそのデータを取った1羽の個体Aに従属しているものであり、このデータは階層性を持っていることとなります。そのような場合、個体を無視してデータをプールし、(a1, b1, b2) や (a2, b2) など、個々のデータを対等に扱って、単純に比較してはいけません。

GLMでは、階層性を考慮すると逆にそれらを過大評価することになってしまうのですが、GLMMは個体差などの変数要因(random factor)をモデルに組み込むことで、「興味は無いけれど無視してはいけない」変数要因を誤差として扱い、実際に「そこが知りたい!!」という部分をきちんと解析できるようになっているという話でした。



写真. 自由集會の会場風景.

しかし、GLMやGLMMで扱うポアソン分布(個数、回数)や二項分布(二値データや割合)などの場合はただでさえ計算が複雑なうえ、変数要因の数が増えるとさらに複雑化するので、原理的にも技術的にも壁があるようです。また、

GLMMといっても、いくつかの方法があるのですが、どの方法が良いのかについてはまだコンセンサスが得られていないので、まだまだ発展途上と言えるでしょう。詳しい講演内容などについては下記のホームページをご覧ください。

【田中啓太 立教大学/学振PD】

自由集會「データ解析で出会う統計的問題」のページ  
<http://hosho.ees.hokudai.ac.jp/~kubo/ce/2006/>

## 研究誌 Bird Research よい

### オオタカの幼鳥 餌を求めて水田地帯へ

第2巻の最初の論文が掲載されました。自分の論文なので紹介しにくいですが「オオタカの幼鳥の分散過程と環境利用」という論文です。オオタカの巣立ちヒナに発信機を付けて追跡したところ、オオタカの幼鳥は巣立ち後、飛翔力がつくにつれて、水田地帯などの開けた場所を中心



に活動するようになることがわかりました。理由としては、この時期に、水田地帯にはスズメやムクドリなどの群れがいるので、営巣地の樹林帯よりも採食地として好適だということが考えられます。

第1巻では、8本の論文を掲載することができましたが、第2巻ではできれば20本ぐらいの論文を掲載したいと考えています。調査結果や観察記録を持ちながら、論文を書く機会を逸している人は多いと思います。まとめていく上でのお手伝いはいたしますので、ぜひこの機会に、投稿をお考えください。【植田睦之 mj-ueta@bird-research.jp】

# アマサギ 英:Cattle Egret 学: *Bubulcus ibis*

## 1. 分類と形態

分類: コウノトリ目 サギ科

全長: 46-56cm  
 翼長: ♂253mm (N=20) ♀248mm (N=20)  
 尾長: ♂87.5mm (N=20) ♀86mm (N=20)  
 露出嘴峰長: ♂52-60mm (N=12) ♀52-58mm (-)  
 ふ蹠長: ♂77 (N=20) ♀76mm (N=20)  
 体重: ♂311g ♀304g

※全長はKushlan&Hancock (2004), その他はCramp&Simmons (1977).

羽色: 雌雄同色. 非繁殖羽はほぼ全身白色だが, 前頭部がわずかにオレンジ色をおびる. 繁殖羽では,



写真1. 婚姻色のアマサギ. 嘴, 虹彩, 目先の裸出部, 脚が赤みを帯びる.

頭部から首と背中への飾り羽がオレンジ色のほかは白色. 嘴と虹彩, 目先の裸出部は求愛期には朱色や赤紫色になる(写真1)が, ペアになると色あせ始め, 抱卵期までには黄色に戻る(写真2). 脚は深緑から黒. 幼鳥は非繁殖羽に似る. 繁殖羽になるまでの年齢は個体差が大きい. 非繁殖羽の個体でも繁殖する.

鳴き声: ねぐらや集団繁殖地以外ではほとんど鳴かない. 集団繁殖地では, 特に求愛期からつがい形成期に行なう各種の誇示行動の際に短くかすれたような声を発する. 求愛期の雄は, 誇示飛翔の際に大きな羽音をたてる. 雛は, 餌をねだるときにツイツイという声を出す.

## 2. 分布と生息環境

分布:

全大陸の熱帯から温帯地域に広く分布し, 世界で最も多いサギである. 日本にいる亜種 *coromandus* は, 日本から朝鮮半島南部, 中国南部, 東南アジア, インド, オーストラリアで繁殖する. 越冬期もほぼ同じ範囲で見られるが, 日本や朝鮮半島, 中国南部の個体は南へ渡る.

アマサギは, 19世紀から, 特に20世紀に世界的に分布を拡げたことで知られている. オーストラリアで最初に繁殖が確認されたのが1954年で, ニューギニアでは1941年, ニューゼーランドでは1963年から生息している. アフリカの亜種 *ibis* は, 19世紀末までに南ヨーロッパと南米に分布を拡げ, 米国に1941年, カナダに1952年に到達した.

生息環境:

日本のほか, 南ヨーロッパや中国南部でも水田が主要な採食地である. そのほか, 堤防や公園などにあるさまざまな草地や畑地(特に収穫直後や耕起直後), 放牧地などでもよく採餌する. 20世紀にみられた世界的な分布拡大は, 大規模に森林が切り開かれて放牧地に変えられたことが大きな要因と思われる. 営巣地は林が多いが, ヨシ原などで営巣することもある. 他のサギ類とともに集団営巣する. コサギやゴイサギに比べると, 同じ林の中でも目立つところに営巣する.

## 3. 生活史



繁殖: 日本の集団繁殖性サギ類の中ではもっとも遅く繁殖を開始する. 本州中部では4月中旬から求愛活動がみられるが, 繁殖失敗によるやり直しも含めて, 繁殖開始は6月中旬まで続く. 繁殖の終わりは他のサギ類とほぼ同じで, 雛への給餌が見られるのは遅くても9月一杯まで. 一夫一妻で繁殖し, 抱卵・抱雛も雌雄で同等に分担するが, まれに一夫二妻を生じることがある(Fujioka 1986).

巣: 木の枝で直径40cmほどの皿状の巣を樹上, 倒れたヨシ原, または地上にかけ. ペア形成から雛が約2週齢になるまでは, 巣を防衛するために雌雄のどちらかがつねに巣に残る.

卵: 一腹卵数は2~6卵で, 日本では4卵程度が多い(Fujioka 1984). 卵はうす青色で, 長径約45mm, 短径約32mm.



写真2. 抱雛中のアマサギ. 嘴や虹彩の色がすっかりあせている. 未孵化卵(←矢印)が見える.

抱卵・育雛期間:

1日おきに産卵し, 初卵産下後すぐに抱卵を始める. 抱卵期間は約24日. 孵化直後のヒナは羽毛におおわれ目も開いているが, 立ち上がることはできない. 3~4週齢で巣から出るようになるが, 親から餌をもらわなくなるまでには孵化後約50日かかる. 繁殖成功率(独立雛数/産卵数)は通常60%以上とかなり高いが, 餓死は少なくない(Fujioka 1984).

渡り:

日本で繁殖するアマサギの多くはフィリピンや台湾へ渡るが, 南西諸島や九州南部でもふつうに越冬する. 繁殖後の分散は8月くらいから始まり, 数十羽以上の群れになって各方面へ移動する. 10月以降には南西方向へ渡るようになる. 春は, 本州中部で4月初めから渡来する.

## 4. 食性と採食行動

地上をゆっくり歩きながら餌を採る. 家畜やトラクターなどについて回って飛び出した小動物をねらうことで有名(写真3). ほとんどいつでも群れで採餌し, 一部のサギ類で見られるような採食なわばりは知られていない. 昆虫類, 中でもバッタ類が元来の主食である. 水田ではオタマジャクシやカエル類をよく採っているが, 主に陸生のアマガエルを採るため, 水生動物を多く採るチュウサギと違って, 圃場整備の影響は受けにくい(Lane & Fujioka 1998, 藤岡 1998).



写真3. トラクターに集まるアマサギ. [photo by Cos]

### 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

#### ● つがい外交尾

ペアになった直後の雌雄は、巣の予定地付近で寄り添って休んだり(写真4)、雄が巣材を運んできては、受け取る雌とあいさつ行動したり、と実に仲睦まじい。しかし、つがい外交尾が頻繁に起きる(Fujioka & Yamagishi 1981)。作りかけの巣を空けておくと周辺のサギ類にたちまち巣材を引き抜かれてしまうので、雄が巣材や餌を取りに出かけるときには、必ず雌が巣に1羽で残ることになる。そうすると、周辺の雄が侵入してきて残された雌と交尾しようとする。雄は、自分のつがい相手を受胎可能な造巣期から産卵期には雌を1羽で巣に残さないようにできるだけ採餌に出かけない。同時に、受精可能な雌が周囲に1羽で残されていると必ずといっていいほど交尾しようと侵入する。雌は雌で、侵入してきた雄と自分のつがい相手の力関係を天秤にかけ、優位な雄となら交尾を受け入れる(図1)。なかなかの駆け引きである。



写真4. 新婚ほよほよのペア。まだ婚姻色のままで、緊張気味。何をしてもなく寄り添っている時期がある。

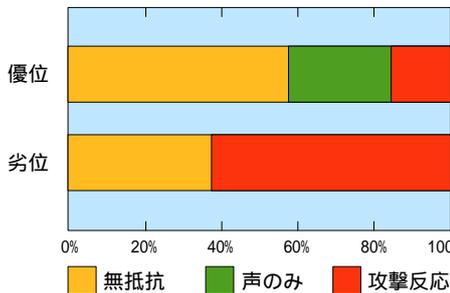


図1. つがい雄が不在のときに侵入してきた雄に対する雌の反応。雌は侵入雄が自分のつがい相手より劣位なら攻撃的にふるまうが優位なら交尾を受け入れることが多い。

#### ● 兄弟間競争

兄弟というのは親子と並んで血の濃い関係だ。しかし、親子と違って、体の大きさや年齢が近く、特に親による子の世話をめぐってはお互いに競争関係にある。アマサギでは、兄弟間の餌の奪い合いが激しく、遅く孵化したヒナが餓死したり集中的に攻撃されて死んでしまうことが少なくない(Fujioka 1984, 1985a)。末っ子が死亡すると、その分の餌はその次に小さかったヒナにまわる(図2)。

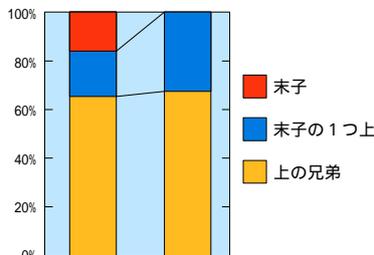


図2. 兄弟殺しによる末子死亡前後の餌配分。末子の死亡によって、その分の餌を次に小さかった雛が受け取ることができる。

実験的に孵化直前の卵や孵化直後のヒナを巣間で交換してヒナの大きさを揃えると、早期の餓死が起きにくくなり、ヒナ間の攻撃行動がいつそう盛んになった(Fujioka 1985b)。このことから、親が初卵産下後すぐに抱卵を初

め、孵化直後からヒナ間に格差ができるようにしていることは、闘争の激化を回避し、餌不足の場合に間引きが起きやすくする意味があるといえる。ただ、兄弟間の争いに親が干渉することはいっさいない(写真5)。なぜかは読者の皆さんで考えてみてほしい。



写真5. 3番目のヒナを激しく攻撃する2番目のヒナ。1番目のヒナは画面外。左側にいるのは給餌に来た親だが、雛間闘争には干渉しない。

### 6. 引用・参考文献

Cramp, S. & Simmons, K.E.L. 1977. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Oxford University Press, Oxford.

Fujioka, M. 1984. Asynchronous hatching, growth and survival of chicks of the cattle egret *Bubulcus ibis*. *Tori* 33: 1-12.

Fujioka, M. 1985a. Sibling competition and siblicide in asynchronously-hatching broods of the cattle egret *Bubulcus ibis*. *Animal Behaviour* 33: 1228-1242.

Fujioka, M. 1985b. Food delivery and sibling competition in experimentally even-aged broods of the cattle egret. *Behavioural Ecology and Sociobiology* 17: 67-74.

Fujioka, M. 1986. Two cases of bigyny in the cattle egret *Bubulcus ibis*. *Ibis* 128: 419-422.

藤岡正博 1998. サギが警告する田んぼの危機. pp.34-52, 江崎保男・田中哲男(編)水辺環境の保全—生物群集の視点から. 朝倉書店, 東京.

Fujioka, M. & Yamagishi, S. 1981. Extramarital and pair copulations in the cattle egret. *Auk* 98: 134-144.

Kushlan, J.A. & Hancock, J.A. 2004. *The Herons*. Oxford University Press, Oxford.

Lane, J.S. & Fujioka, M. 1998. The impact of changes in irrigation practices on the distribution of foraging egrets and herons (Ardeidae) in the rice fields of central Japan. *Biological Conservation* 83: 221-230.

#### 執筆者

藤岡正博

筑波大学農林技術センター  
井川演習林

サギとは無縁の山岳地勤務になりましたが、サギのことは一時も忘れたことはありません(?)。ここに紹介しませんが、セスナ機を使ったサギの調査も、効率的かつ楽しいものです。毎年6~7月にサギ山の「公害」問題が各地で報道されるたびに悲しい思いをしています。



レポート

ツバメかんさつ全国ネットワーク2006  
が始めました!

日本野鳥の会自然保護室/  
バードリサーチ嘱託研究員 神山 和夫

皆さまのところに、ツバメがやってくるのでしょうか?今年もツバメかんさつ全国ネットワーク(図1)が始めました。

ツバメかんさつ全国ネットワークは、ツバメの観察日記をデータベース化して、周辺環境と繁殖成績などとの関係を解明しようという試みです。



図1. ツバメかんさつ全国ネットワークのトップページ。

この調査は2004~2005年に国土交通省の事業として行われましたが、今年からはバードリサーチと日本野鳥の会がその運営を共同で引き継ぎ、実施していくことになりました。データベースのシステムはバードリサーチのWebサービスに設置されています。

ツバメかんさつ全国ネットワークのホームページ

<http://www.tsubame-map.jp/>

には、ツバメの様子を写真入りで記録している日記がたくさん登録されています。刻々と成長していくツバメの様子を見るだけでも、大変楽しいものです。ぜひ、ご覧下さい。



図2. ホームページのツバメ地図。  
▲の印をクリックするとその場所のツバメ日記を見ることができるようになっています。

図書紹介

わたしのカラス研究

柴田佳秀著/さ・え・ら書房 定価1400円(税別)

事務所の傍にもハシボソガラスの巣が一つあります。ここ数日は、進入してくるハシボソガラスにピリピリしていて、夫婦で追いかけてまわしているのが窓越しに見えます。

今年もカラスのヒナが巣立つ頃になると、カラスの番組が増えるのでしょうか?人を攻撃する、ゴミを散らかすなど、カラスの悪事を取り上げたものはたくさんありますが、中にはカラスの生態や行動、増えた理由などを正しく伝える自然番組もあります。自然番組のディレクターとして1996年にカラスの番組を企画したのをきっかけに10年間独自の視点と実験センスでカラスの研究をしてきた柴田さんが、ご自身のカラス研究についてまとめた本を出版されました。1冊いただきましたので、皆さまにご紹介したいと思います。

最初の興味は、なぜゴミを食べる時に散らかしてしまうのか、ということだったそうです。たくさんのカラスがゴミに群がっているの、目で観察していても良くわからなかったのですが、ビデオに録画して見てみると、目的の餌を袋から引っ張り出すのに、手前であって邪魔なゴミを袋から引っ

張り出して周りに捨てるので、カラスが食べた後のゴミ捨て場は散らかってしまう、ということがわかったそうです。

この後、著者は、食べ物の好き嫌いを給餌実験で調べ、透明ゴミ袋の出現と東京のカラスの増加の関係を調べ、超小型カメラを巣に仕掛けてカラスのヒナの成長を調べ、いろいろな調査をしました。

この本では、それらの調査をわかりやすく紹介しているほか、海外も含めたカラス類の「賢い」行動を追いかけて映像に収めてきた話なども読みやすくまとめられています。大人の人にも楽しんでもらえる内容ながら、生き物に興味を持ち始めた小学生にも読みやすく、お勧めしたい本だと思います。【高木憲太郎】



バードリサーチニュース 2006年4月号 Vol.3 No.4

2006年 4月 14日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ  
〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 II-202  
TEL & FAX 042-594-7379  
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎